

ULM 留学を終えて 教育学部 総合人間形成課程国際理解教育コース
4236031U 徳増萌々

2017年8月から2018年5月まで、ルイジアナ大学モンロー校に留学をした。その中での「気づき」について項目別にまとめたいと思う。

ルイジアナ、モンローの文化について

9か月の間で、Jambalaya（ジャンバライヤ：写真真ん中）や Gumbo（ガンボ：写真右端）などルイジアナ州特有の料理を堪能した。中でも衝撃的だったのが、春シーズンにかけてルイジアナの人々はザリガニ（Crawfish）をスパイスと共に大量に食べることだ。現地の友人に、「日本ではザリガニをペットとして飼育する人も珍しくないよ」と伝えるとそれは冗談かと笑われたくらいだ。次にルイジアナの人々について、町全体が田舎だということもあり、温厚でマイペースな人が多く、速足で歩いている人を見かけたことはない。学内では、ほとんどの割合をアフリカ系アメリカ人、白人が占めており、アジア系アメリカ人も少数見かけた。印象としては、それらの人種別でグループを作っているということだった。ルイジアナの観光名所であるニューオリンズの近くに Vicksburg という町があるが、そこは1863年に市民戦争が起こった町で、黒人奴隷を無くそうと運動する北部の人々と、奴隷を保持したいという南部の人々の戦いだった。Vicksburg 記念公園には白人アメリカ人の友達に連れて行ってもらったが、彼女がアメリカ南部の人種問題について語ってくれた。私をその場所へ連れて行ってくれたのも、アメリカ市民戦争の歴史と、まだまだ続く人種差別問題の現状について知ってほしいという思いからである。



大学内での授業

私は元々英語があまり得意ではなかったため、前学期は ESL (English for Second Language) の授業を3つも取っていた。後期は、自分の受けたい授業を受けることができ English Composition や Public Speaking など実用的な授業を受講していた。計4回の論文と3回のプレゼンを経て、主に論理的なライティングスキルと人前でのスピーキング力を伸ばすことができた。これらの授業で気づいたことは、ネイティブスピーカーではないからと言って、私の論文やスピーチが決して劣っている訳ではないということ。何を伝えたいのかを明確にし、反復練習を重ねることで、他の学生よりいい仕上がりになったこともある。将来、英

語で何か発信することがあるかもしれないが、これらの授業は大きな自信に繋がった。また、特に Interpersonal Communication の授業は留学中の私生活にも役に立った。アメリカではコミュニケーション学という分野があるくらい、社会でも教育でもコミュニケーションスキルを重要視している。近年の調査の結果、アメリカ企業が従業員に求めるスキルの第一位はコミュニケーションスキルだ。最初は、コミュニケーションなんて自然と身につくものだと考えていたが、学習していくうちに、他人とコミュニケーションの際相手の文化の特徴などを意識して話していることに気付いた。ラインやメッセージなど SNS でのやり取りも、学習したことを活かしている。私の専攻は国際理解教育だが、これらの学習を進めていくにあたって、異文化間コミュニケーションを学ぶことは国際理解の基盤を作ると感じた。

授業外での活動

授業外では、主に日本語教育と文化発信に努めた。日本語教育はボランティアとして実施し、基本的にマンツーマンで授業を行った。もうすでに日本語で簡単な会話ができる学生もいれば、アニメで聞いたり見たりした単語だけを知っている学生もいた。どの学生も日本文化に興味津々で、「お遍路に母が挑戦したいと言っているのですが」「松山城に上って、侍の格好がしたい」など、私の地元文化について話してくれることもあり、質問されたら全力で答えた。渡航前は、アメリカでは日本語教師の需要が低く、働くのは難易度が高いと思っていたが、実際思っていたよりも日本語学習に興味のある学生が多く、彼らはただ日本語を学ぶ機会が少ないことに気づいた。小学校では日本語教育が選択科目の学校もあるが、アメリカ人教師が片言の日本語を教えているようだ。ULM には中国語、フランス語、スペイン語、ラテン語の授業が第二外国語科目としてあったが、日本語科目があったら日本語を受講したいという学生も何人も見かけた。今回の日本語教育ボランティアは、そんなアメリカ人学生にとって有効的だったと思う。また、学内のイベントには積極的に参加した。International Food Festival では、留学生が各国の料理を販売するのだが、私はおにぎりを用意した。狙い通り認知度は高く、ほとんどの人はおにぎりをアニメなどで見たことはあるが食べたことがないとの事だった。大好評のおにぎりと共に、祖母手作りの千代紙と押し花のできたしおりをプレゼントしたのだが、これがまた反響を呼んだ。というのも、そのしおりはかなり手が込んでおり、それぞれのしおりは手作りで、裏には手書きで詩や格言が書かれてある。それを無料でどんどん配っている事に驚かれたのだ。これは日本のおもてなし文化である。基本的に「ギブアンドテイク」の関係で成り立つアメリカ人にとって、「ギブアンドギブ」の日本文化は高い評価を受けた。そして最も力を入れたのが「焼き物フェスティバル」だ。去年一年間砥部焼大使を務めた事を活かし、何かできることはないかと考えたイベントで、参加者の満足度は非常に高かった。砥部焼とルイジアナの Newcomb Pottery に類似点があることから、その二つを融合しようと考えたものである。ULM の教授に協力してもらい、プレゼンや器、サンプルの準備を進めた。海外で自らイベントを企画し、開催するというのは初めての体験だったのでかなり大変だったが、終了後は大きな達成感を得た。



留学生同士の関わり

アメリカに住み、アメリカ人と関わる中で学ぶことはたくさんあったが、他国の留学生との関わりも、国際理解教育を学ぶ私にとっていい経験だったと思う。例えば、同じアジア圏内でも国によって国民性は非常に異なる。ULMには300人ほどのネパール人がいたが、シャイな性格の人が多く、コミュニティを大事にする部分は日本人に似ており、親近感が湧いた。また、ベトナム人の友達もたくさんいたが、おしゃべり好きで1人でご飯を食べていたら放っておかずに必ず声をかけてくれるなど、温かい国民性であるというイメージを持った。私は外国人に対し差別的な偏見などは持たないが、やはりイメージだけでその国に対して誤解している事がまだまだある。例えば、カースト制度に対して良くないイメージ(差別的イメージ)を持っていたが、実際カースト制度が残っているネパールの人々はそれほど気にしていなかったり、アフリカのダンスはどの国も似ているのかと思っていたら、隣同士の国でも全然違うよ!とナイジェリアの友達に軽く怒られたり。こういった経験は、私の異文化理解への学習意欲を掻き立てた。異文化間交流をする上で、マナーやタブーなど知っておかなければならないこともたくさんあるが、私はそれ以上にこの人達ともっと心から理解しあいたいという気持ちの方が大きい。



まとめ

今回の留学では、文化理解・発信の目的に沿って、自発的に行動できたと思う。伝えたいことがあるからこそ、相手が使用する言語を学び、それを活かして発信・受信する。私が行っ

た日本語教育や文化発信は決して大規模ではないが、この小さな活動、そして個々の繋がりが平和な世界を作る鍵となることを信じている。これからもチャンスを見つけては、この活動を続けていきたいと思う。